現代中国の書家二十人を紹介する不定期連載

中国当代書家二十人

第3回

劉江

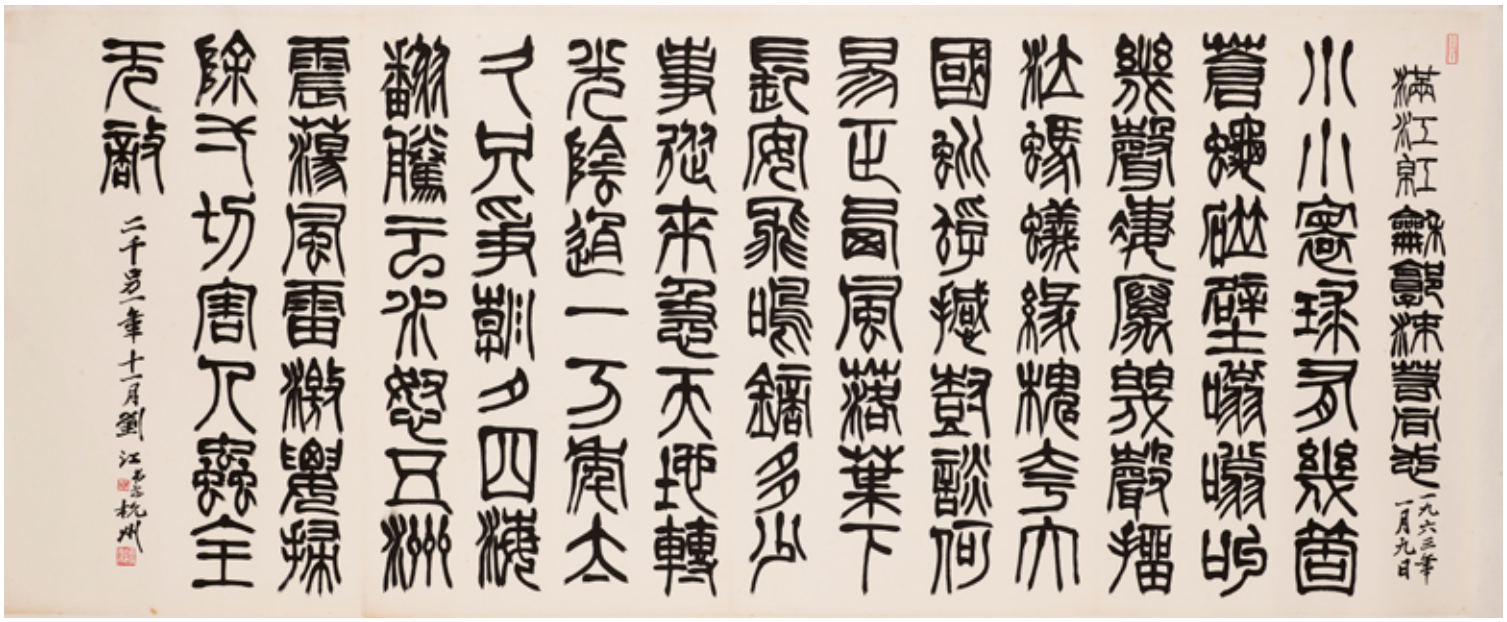
りゅうこう

一九二六年四川省生まれ。国立中国美術学院教授、西泠印社執行社長、中国印学博物館館長。嘗て、国立中国美術学院共産党支部長、中国書法家協会常務理事、中国書法家協会書法教育委員会副委員長、中国書法家協会篆刻委員会委員、中国書法家協会創作審査委員会委員、西泠印社副社長、中国書法教育研究会副理事長、浙江省書法教育研究会理事長、浙江省書法家協会副会長などを歴任。

国立中国美術学院教授、西泠印社執行社長、中国印学博物館館長の劉江氏。長年にわたり西泠印社の重役を兼務してきた関係で日本書壇に知人友人を多く持つ、正真正銘の知日派であり、大学書法教育の先駆者でもある。マスメディアの取材がシャットアウトされているなか、郭同慶氏による取材が叶った。（編集部）

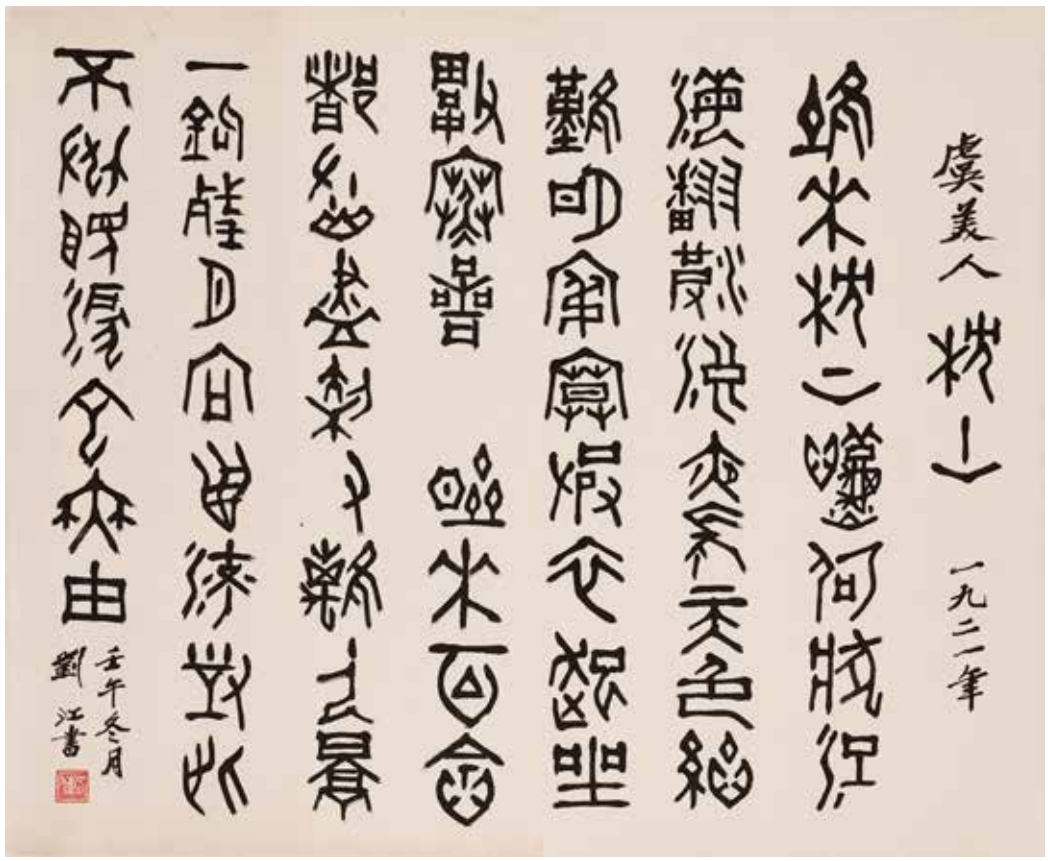
取材・文／郭同慶

中国当代3.indd 84 2018/03/29 17:01



181×73.5　2001年

篆書
《滿江紅・和郭沫若同志》
（毛沢東詩詞）



90.9×73.6　2002年（壬午年冬）

篆書《虞美人・枕上》（毛沢東詩詞）

中国当代3.indd　85　　2018/03/29　17:02

大学書法教育の先駆者　劉江

中国美術学院とともに歩んだ人生

中国の二大国立美大のひとつである中国美術学院は今年卆寿になった。三月十六日、杭州市内西湖傍の孤山などの新旧キャンパスにおいて、中国美術学院建校九十周年の式典が様々な形で盛大に執り行われた。《国美（国立美大）の路大展》という大学の美術・書法教育の歴史を回顧する叢書、十六巻三十九冊を、一五〇〇万字、二万枚の写真入りで出版。記念展やシンポジウムなどを開催し、杭州は御祝いムード一色に覆われた。九十二歳になる劉江教授は、誰よりも感嘆万千に至る思いだ。十八歳の時に入学して以来、学院とともに人生を歩んで来た。劉江教授は中国を代表する金石学者、書法大家であり、書法教育家でもある。一九九〇年に中国美術学院（当初浙江美術学院）の派遣により、岐阜女子大学で一年ほど中国書道を教えたこともあり、また長年にわたり西泠印社の重役を兼務してきた関係で日本書壇に知人友人を多く持つ、正真正銘の知日派である。

先日、劉江先生に二十数年ぶりに拝謁した。ご高齢のため、マスメディアの取材は既にシャットアウトされていた。しかし、ある門弟の方の根回しで特別にご家族より取材のお許しをいただき、また、日本留学経験者であり中国美術学院で教鞭を持つご子息の劉丹氏に協力いただいた結果、無事にこの取材を執り行うことができた。幸いを得た喜びと感謝の気持ちで一杯である。

疎開中の美大に出会う

劉江先生は一九二六年七月に（四川省）重慶市万州区で生まれた。四川は古来、蜀の邦として「天国のように富の国」といわれるほど悠久なる歴史を持つ、尚物質的な文明の発達した地域である。劉江は幼い頃から周りの名所旧跡に薫陶され、特に地元の浦江摩崖石刻群や楽山大仏石刻造像などに魅了された。劉江の絵心は少年時代に既に芽生えた。幸運とも言える、十八歳の劉江は千載一遇の好機に恵まれた。

というのは、戦火で約二〇〇〇キロ先にあった国立杭州芸術専門学校が疎開で内地の重慶にやって来たのである。教育家蔡元培が一九二八年杭州で創設した中国最初の美大・「国立芸術院」が翌年に「国立杭州芸術専門学校」に名称変更し、ちょうど十年目になる同美大にも戦争の情報が伝達された。一九三七年七月七日に起きた盧溝橋事変により日中戦争が勃発。十月には隣接する上海城が陥落。戦禍に巻き込まれそうな同校が直ちに疎開を開始した。翌年に北平（北京の旧称）芸術専門学校と合流し校名を改めて「国立芸術専門学校」となった。

同校はまず省西の諸暨へ、その後に江西省の貴渓、湖南省の長沙、沅陵、雲南省の昆明そして、四川省の壁山へ益々西の奥へ避難し、一九四二年に最終的に山城の街で重慶に辿り着いた。戦火の回避で、五年間に五省と七つの町を転々とした同美大は、重慶の険しい山陵の地形を天険とし定着した三年目（一九四五年）の春に、美術青年・劉江が地元の師範学校を卒業し、その門を叩いた。勿論、優秀な成績で入学ができた。そして、その同年夏に終戦となり、美大一年生の劉江も全校先生と学生と共に杭州に戻った。一九四六年夏に風光明媚な江南歴史名城・杭州で復興した「国立芸術専門学校」で再び美術を学ぶこととなった。西洋絵画を専攻し主に陳大羽、林風眠等の教授に洋画を学んだ。一九四九年、卒業の年に新中国が誕生した。劉江は若き美術青年たちと共に街に出て市民らの祝賀ムードに交り込んだ。新中国を建設する事は政府の最優先課題の政策下で、芸大生の劉江は二人のクラスメートと一緒に国の呼び掛けに応じる形で兵役に約七年間を服した。

一九五七年に再びに美大に戻った時に大学は既に二度の名称変更を行っていた。一九五〇年「中央美術学院華東分院」、そして一九五六年に「浙江美術学院」になった（ちなみに、今現在は「中国美術学院」と称す）。今度は国画（中国画）学部を選択した。教授陣には潘天寿、陸維釗、諸楽三等著名な書画金石家が揃っている。中国では書画印三者同源という思想で国画（中国画）学部ではこの三つの勉強の機会を与えられた。しかし、潘天寿学長は「寧要四全、不須三絶」「むしろ四全（詩書画印）を要り、三絶（詩書画）は不要である」を以って在学生に訓示

少年時代の劉江（13歳）

中国当代3.indd 86　2018/03/29 17:02

133.2×32.6　2008年（戊子清明）

篆書《馮玉祥聯》（対聯）

135×33.8　2008年（戊子初夏）

篆書《童大年撰聯》（対聯）

中国当代3.indd　87　2018/03/29　17:02

した。そのこころは、勉強する美大生に篆刻という「方寸」芸術の重要性を強調した訳だ。劉江は学長の方針を素直に実行し書画が勿論、丹念に篆刻の勉強に精力を注いだ。学長の潘天寿は劉江の才能特に見抜き、書道及び篆刻特に文字学に対する研究成果を高く評価し、そして自ら指導を加えた結果で劉江は一九六一年にトップ成績で卒業すると同時に同美大に講師として残ることになった。潘学長の御意向を受けた劉江は学部のなかで書道篆刻必修課程の創設に当初より携わった。

大学書法教育の先駆者

一九六二年に文化部（文部省）が浙江美術学院中国画学部で書法専攻課程の開設を批准し潘天寿学長はその準備作業チームを組織した。杭州大学より招聘した国学者・書画金石大家陸維釗教授（六十三歳）が責任者となり、劉江（三十六歳）は助手となった。また教授は潘天寿（六十五歳）、沙孟海（六十二歳）、呉茀之（六十二歳）、方介堪（六十一歳）、朱家済（六十歳）、そして諸楽三（六十歳）、みな還暦後の大家が揃った。数え切れないほどの準備実務は必然的に一番若い講師の劉江に託された。

ここから、中国の大学における書法教育の序幕を切り開いたのである。

潘天寿学長自ら「書法専攻課程」の開設について、座談会や討論会を召集し、大学内外の学識者邵裴子、夏承燾、胡士瑩など著名な知識人らの助言も聞き入れた。クーラーのない一九六二年夏に、潘学長の配慮で、ギャンパスの中の高木の陰に覆われた事務棟を作業チーム専用にした。連日の会議で作業チームのメンバーは団扇を煽りながら「書法専攻課程」に関する予算組み、教材の制作選定、専攻課程期間の設置及び卒業後の就職進路まで検討且つ議論を重ね、みんなの知恵で教育方針を定めた。

次は方針に沿って実務を行う。また、劉江の出番だ。陸維釗教授に同伴し上海、蘇州、紹興などに出掛け、教材教本資料になる碑帖拓本、墨蹟原作及び印譜印拓を購入。上海だけで二十日間を滞在し、古籍書店、上海書店、文物書店などの店舗の棚上の物は勿論、倉庫や書庫まで特別に開けてもらった。その年末までに一万冊に近い専門書籍で画冊や拓本、印譜などを揃えた。みな陸維釗教授とで劉江助教授のコンビが汗を掻いた結晶だ。

翌年（一九六三年）九月に書道専攻課程がスタート。一期生として金鑑才、李文采が入学、翌年九月に朱関田、蒋北耿、楊永龍三名の二期生が入学。文化大革命期は十年以上には止むを得ずに中断し再開したのは一九七九年だった。劉江教授は上司の陸維釗教授と共同に中国書法教育史上の先駆けとして書法専攻の大学院生課程を開設した。朱関田、王冬齢、邱振中、祝遂之、陳振濂の五名が厳選された。高齢且つ多病な陸教授は入院が繰り返されていたが、代わりに助手の劉江助教授は大活躍した。陸教授の御意向で大学院生の教育綱要を起稿し講師陣の段取りまで務めた。因みに、主な科目は及び担当した教授は下記の通り：書法及び書論は陸維釗教授（六十五歳）、書法及び金石学は沙孟海教授、篆刻及び理論は諸楽山、篆刻は劉江教授、古代漢語（古文書）は章祖安。前の三名教授は超一流の大家で、後半二人は共に学院の中堅で実力者。創設の責任者で恩師兼ねて上司の陸維釗教授は翌年の一九八〇年一月に病死。沙孟海教授が後任となったが。沙教授は既に八十歳を過ぎており、北京で入院する期間も長かった。劉江教授は一刻も休まずに担任教授ら一丸となり、心身共に教鞭を執った。一九八一年に五人の卒業論文及び答弁は学院教授会で満場一致で立派に通過した。三十数年後の今日は五人とも中国書壇の重鎮となった。劉江教授は半世紀以上に中国美術学院に心身共に奉仕し沢山優れた人材を世に送り込んだ。潘天寿学長や陸維釗教授、沙孟海教授と並び中国美術学院書法学部の開拓者であり、中国書法教育の先駆者である。

同美大は一九九六年に博士課程を設けられ、そして二〇〇一年に他の大学、美大を率先し書法学部を設立し

1957年に再び大学に戻った劉江（左端）は西湖旁でクラスメートと一緒に潘天寿学長（中央帽子被る方）を囲んで記念写真。中央の橋欄干に腰掛ける女子は章培筠、後に劉江と結婚し今に至る。潘学長左側の少年は後に中央美術学院学長になった潘公凱。

恩師・諸楽三先生（1970年）

中国当代3.indd 88 2018/03/29 17:02

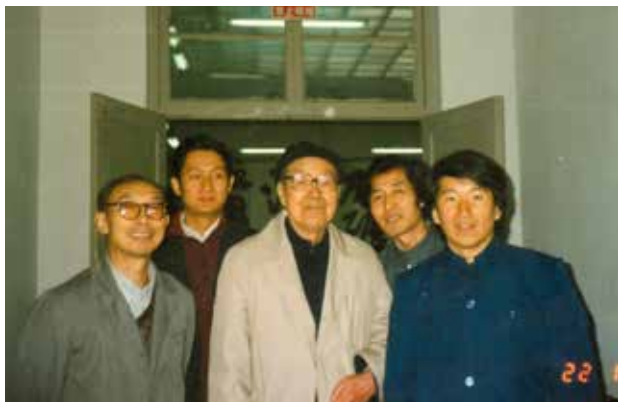
左から、潘公凱、劉江、唐勇為、章培筠

一九八七年、日中書家の集い「蘭亭雅集・曲水流觴」にて、席上揮毫する劉江（中央）、谷村熹斎（左）、梅舒適（右）

一九九六年六月四日、啓功氏が西泠印社に来訪

一九八七年九月二十二日、西泠印社事務室にて。左より、劉江、今井凌雪、郭仲選、小林斗盦

一九九六年六月四日、西泠印社会議室にて、劉江副社長（左）が啓功氏（二〇〇二年～二〇〇五年の間に西泠印社社長を兼務）の来訪に対応



一九八七年十月二十二日、左より、劉江教授、祝遂之講師、沙孟海学長、王冬齢講師、前田秀雄氏

た。創業初期には劉江先生の献身的な貢献が無ければ国立中国美術学院の書法学科今日の繁栄は無いといっても過分ではない。一九七九年以降卒業した外国留学生は二〇〇名に登り、各自の祖国で活躍しているようである。劉江先生が指導した日本人留学生の数は少なくない。

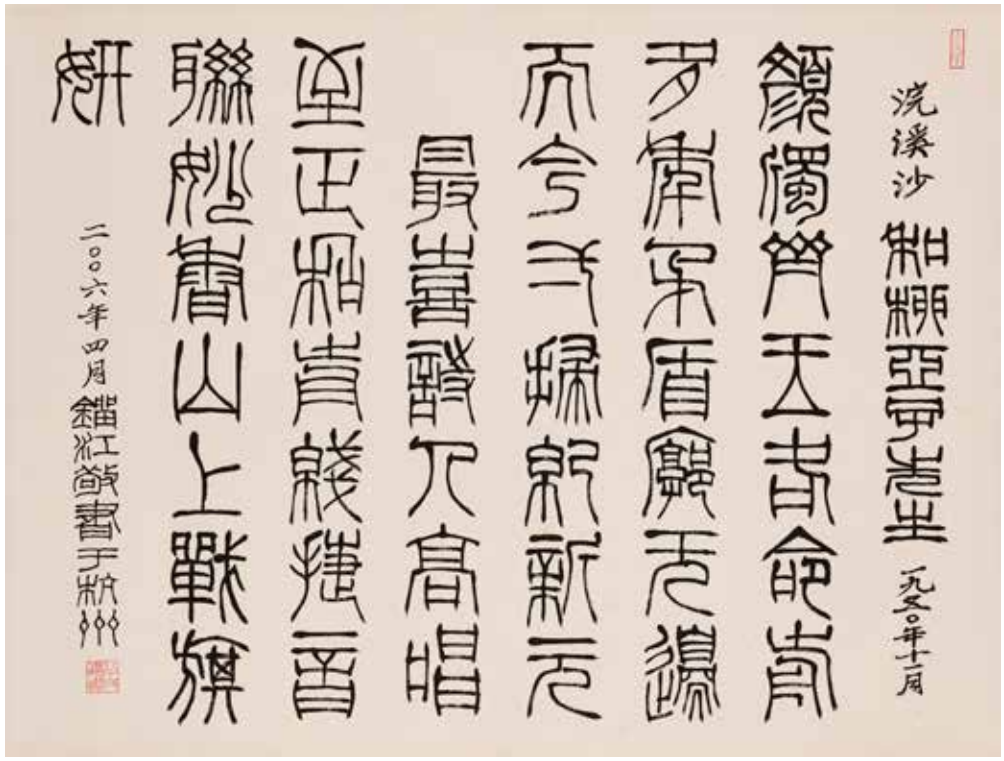
豊かな業績を造り上げた書法篆刻大家

日本で最も知名度の高い中国の金石書画団体である西泠印社社長の「宝座」は啓功氏が二〇〇五年に仙去以来、空席だった。二〇一一年十二月に西泠印社「第八届理事会第六回会議」で六年ぶりに香港在住の国学者である饒宗頤氏を第七代目社長に推戴すると同時に徳が高く声望がある副社長劉江氏を執行社長に擁立した。「文人相軽んず」という風潮もあり、書画世界は特に難しいところもあるなかで両氏に対して満場一致で賛同したのだ。百歳に近い饒宗頤氏は遠距離という点もあり、なかなか印社の実務に触われ無かったのであるが、一方杭州に半世紀も住み慣れている劉江先生は名実共に執行社長で豊かな業績を造り上げた。

劉江教授は書家篆刻家として日本との交流も非常に多い。一九八七年の早春に歴史に残る日中書家交流の集いがあった。共同開催は讀賣新聞社と人民日報社だった。東晋時代に王羲之が主催した「蘭亭雅集」を再現する趣旨に日中両国の書家代表が一堂に集まった。青山杉雨、村上三島、小林斗庵、谷村熹齋など、二十人ほどの大家が参列した。中国では啓功、沙孟海、そして劉江教授らが出席した。曲水流觴の宴上では劉江教授の右は梅舒適、左は谷村熹齋、曲水の相迎え側は青山杉雨、沙孟海だった。トップ同士が酒を交わし詩書の交流を楽しいそうに行った。

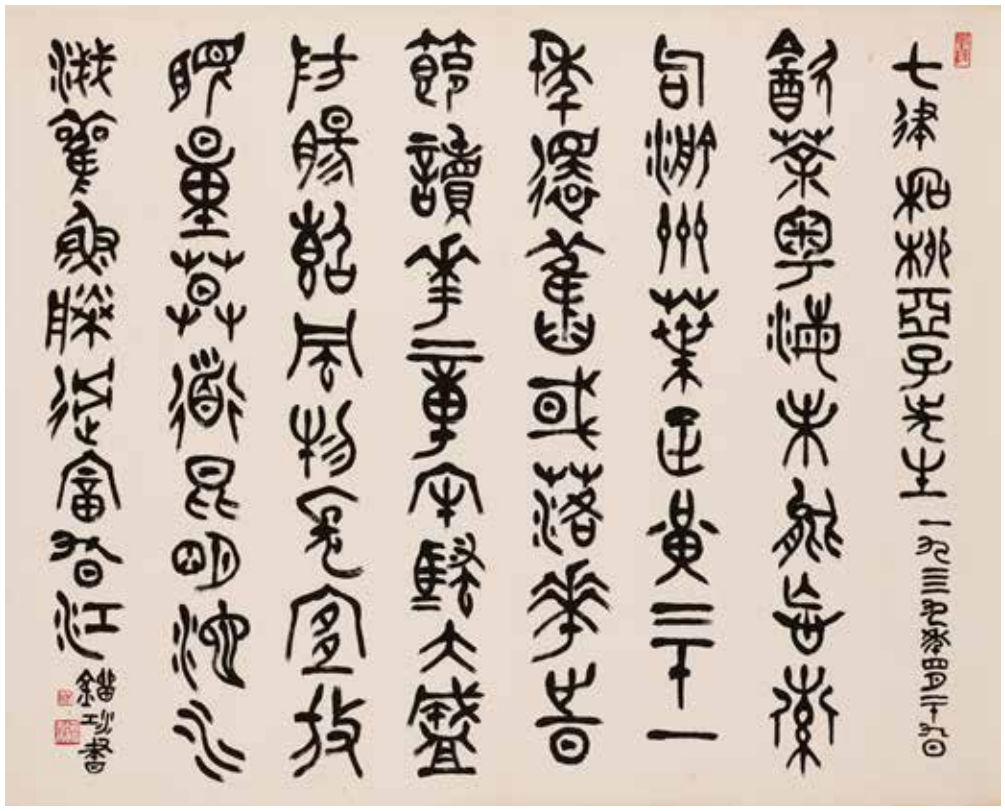
私は一九八七年に来日。劉江教授が一九九〇年に中国美術学院の派遣により岐阜女子大学で一年ほど教鞭

中国当代3.indd 89　2018/03/29 17:02



92.2×70.3

篆書《浣溪沙・和柳亜子先生》（毛沢東詩詞）



91.4×73.5

篆書《七律・和柳亜子先生》（毛沢東詩詞）

を執った。その間、劉江教授を訪ね、印章や書作を求めたことを記憶にしている。聞くところによると、ファン達の好意で劉江教授個展を岐阜催したそうである。作品の購入希望者が殺到し、予定外に作品を割愛し希望者に分けた。

仁徳の高い劉江教授は帰国後にふるさとの重慶市万州区教育委員会に全額を寄付した。小学校の建設に役に立ってほしいという仁愛的な「鶴の恩返し」だ。改革開放の側面の影響で、お金に走る風潮は書家画家たちにも例外ではまい。然し、劉江教授は一貫として学問や教育に特段に熱心に取り組むと同時に金銭に迷わず追及しないというこの姿勢は非常に高く評価され書壇みなよしとほめそやす。二〇〇二年に浙江省が「二〇世紀突出的に貢献した芸術家」と表彰、二〇〇五年に中国書法家協会より「二〇世紀徳芸双馨な芸術家」の称号を受領した。

劉江教授が中国印学博物館館長や浙江省甲骨文字研究会会長を兼ねている。半世紀以上に書法教育の現場で甲骨や古印などの古文字を始終のテーマとして研究を成し遂げた。著書や作品集には甲骨文や古印に関連するものが多い、《甲骨書法論》、《劉江甲骨文書法集》、《劉江甲骨文書法百幅集》、《劉江甲骨文百印集》、中国印

中国当代3.indd 90 2018/03/29 17:02

甲骨文（対聯）

167×26.3　2009年（己丑年）

勤倹建邦官廉民奮和諧共処慶富強
改革開放国運隆昌世欣逢得福寿

篆書《七絶・観潮》（毛沢東詩詞）

70.3×46.5　2005年

甲骨文《龍亀増福寿甲骨致吉祥》

176×49　2009年（己丑）

章芸術史》、《略論唐宋元官私印》などが代表である。そのほかは、《篆刻教程》、《篆刻技法》、《篆刻芸術》、《篆刻美学》、《篆刻形式美》、《印人軼事》、《呉昌碩篆刻及び章法》、《呉昌碩篆刻及び側款》、《呉昌碩篆刻及び印刀遣い》、《諸楽三評伝》、《篆刻常用字典》などの著書があり、作品集は《劉江篆書楹聯百幅集》、《劉江書唐詩百首》などがある。その中では《篆刻技法》、《篆刻形式美》などは日本語や韓国語に翻訳されている。

「字如其人」、即ち字はその人の如し。劉江先生の書風や印風はその穏やかであり俗塵を遙かに超越した貴人の風貌が私の目によく映る。今年で九十二歳になる劉江先生は書法篆刻藝術や大学書法教育に燃え尽くした大功労者の功績は近代書法史に濃い一筆で明記されることと確信する。

近い内、杭州で「劉江藝術館」が出来ると聞いた。浙江省劉江藝術研究会や中国美術学院や西泠印社及び浙江省無形文化財保護研究センターの四団体を中心とした共同作業チームが形成された。劉江教授は全生涯で創作及び収蔵した書法、篆刻印章、絵画、原稿、書簡、文房古董、写真映像等、一〇〇〇点を超える名品を寄贈し、公の「劉江藝術館」に収蔵される。

郭同慶 かく・どうけい
書家、日本名山田慶太郎。一九五七年、上海生まれ。一九八七年に来日。王蘧常、銭君匋、蕭春海に師事。二〇一四年度で上海（朶雲軒）、東京、京都、前橋で個展を開催。上海書画出版社で《墨海一粟》作品集を出版。翰墨書道会長、東京藝術院長、東京海派書画院常務副院長、全日本華人書法家協会副主席兼秘書長、豊道春海顕彰会顧問、（公社）日中友好協会参与、群馬県日中友好協会理事、上海呉昌碩藝術研究協会理事、上海復旦大学王蘧常研究会常務理事、上海（玉佛禅寺）覚群書画院画師などを兼ねる

中国当代3.indd 91　2018/03/29 17:02